



第40回

福井県発掘調査報告会

— 令和6年度に発掘調査された遺跡 —

2025

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

（表紙写真 沖布目北遺跡住居検出状況）

★は報告会での発表遺跡

Map of Toyama Prefecture showing the locations of 8 observation points marked with red dots and numbered 1 through 8. The map includes labels for various cities and towns such as Awara City, Nagaoka City, and Toyama City. A north arrow is located in the top left corner.

1

じんぐうじじょうあと ちゅうせいぼち 1 神宮寺城跡（中世墓地）

所在地：あわら市沢 59 字

調査原因：遺跡整備に備えた石塔周囲確認調査

調査期間：令和 6 年 11 月～12 月

調査主体：あわら市教育委員会

調査面積：4 m²

時代：平安～室町



位置図（S=1/50,000）

遺跡について 神宮寺城跡は、あわら市指中と沢にまたがる山城で、県遺跡地図では川口城跡（神宮寺城跡）と併記されています。戦国時代に朝倉氏が加賀の一向一揆に備えて築いた前線基地と考えられます。城跡は神宮寺跡後方の高応山山頂部を中心として築かれ、その南に延びた尾根の先端に、神宮寺に五輪塔を始めとする石塔が密集した中世墓地跡があります。石塔類の確認調査中に、一部露出した状態で蔵骨器が集中している部分が発見されたことから、資料の保存を目的として2m四方を発掘調査しました。

主な遺構 墓地跡は、約 35m×20mの範囲に平坦面を二段に削平しており、下段のほうが広く三角形状に造成されています。五輪塔類はこの上下段に散乱・密集しており、空風輪の数だけで 220 点以上確認できました。

主な遺物 最も古い遺物は平安末期の猿投窯広口壺片です。以後、鎌倉時代初頭の常滑窯・渥美窯製の可能性が高い三筋壺や二筋壺、南北朝期までの珠洲・加賀・越前の甕・壺・擂鉢等の他、石櫃形石製品や中世土師器等が出土しています。このうち、越前焼の筒形容器を含む7点の遺物の中には焼骨が残っていました。焼骨の中に歯はまったくなく、当時の葬送儀礼を考察する貴重な事例です。

出土したのは蔵骨器と考えられる中世の陶器が中心で、これらは埋葬当時の原位置ではなく、平成初年頃に当該地周辺が植林された際に掘り出されたものを、2 次的に

一箇所に集めたものと推定されます。

二筋壺は渥美窯製の可能性が高く、そうだとすれば同窯製品の日本海側での初確認例となる貴重な資料です。今後、出土した陶器の産地同定を行うことで、当地における中世の葬送儀礼や陶器流通の実態解明につながるものと期待されます。

（田嶋正和）



写真1 蔵骨器等出土状態



写真2 東海系三筋壺・二筋壺等



写真3 越前焼壺等

おきぬのめきたいせき 2 沖布目北遺跡

所在地：坂井市春江町沖布目

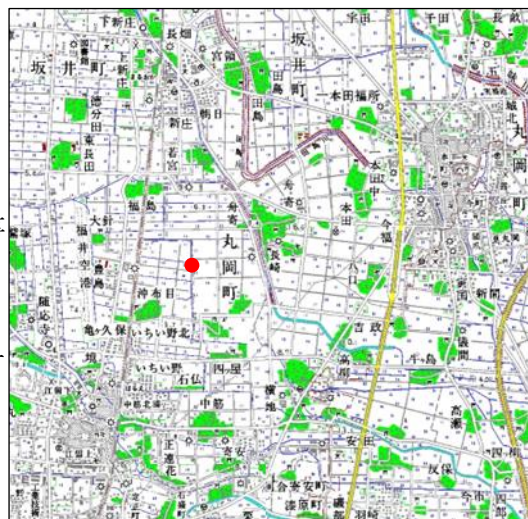
調査原因：一般県道福井森田丸岡線道路改良工事

調査期間：令和6年6月～10月

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：1,800 m²

時代：縄文時代・弥生時代



位置図 (S=1/50,000)

遺跡について 沖布目北遺跡は福井平野のほぼ中央に位置し、竹田川の支川である兵庫川沿いに立地しています。令和3・4年度に主要地方道丸岡川西線福井港丸岡インター連絡道路改良工事に伴う発掘調査が実施され、建物や埋設土器、土器だまりなど縄文時代後期の集落に関わる遺構を数多く検出しています。今回の発掘調査地は、令和3年度発掘調査地の南側に隣接しています。

主な遺構 遺構には、竪穴建物や溝、埋設土器、土器だまり、自然流路などがあります。遺構の時期は、縄文時代後期と、弥生時代中期とに大きく分けられます。

縄文時代後期の遺構には、竪穴建物や多数の柱穴、土器だまりなどがあります。竪穴建物の内部には、石囲い炉や屋根を支える柱の穴を確認しました。石囲い炉の内部にはほぼ完形の土器が出土しました。また、竪穴建物南側に近接して、土器などの生活道具を大量に廃棄した土器だまりを確認しており、竪穴建物の近くに不要になった土器などの生活用具を捨てていたことがわかりました。調査地中央の自然流路から南側は低地域かつ遺構や遺物が非常に少ないため、今回の調査地は縄文時代集落の南側縁辺部であると推定しています。

弥生時代中期の主な遺構には、溝や埋設土器があります。溝からは廃棄された土器や打製石包丁などが出土し、弥生時代中期の集落の存在が明らかとなりました。

主な遺物 縄文時代後期の遺物として、多量の土器や石器のほか、朱塗りの土製耳飾りや水銀朱が付着した磨石も出土しています。また、弥生時代の遺物として、土器や玉作り関連の石器などが出土しています。

(松本泰典)



写真1 調査区近景(北西から)



写真2 竪穴建物と土器だまり(北から)



写真3 竪穴建物内の炉跡(西から)



写真4 捨てられた土器(西から)



写真5 朱塗りの土製耳飾り(北西から)



写真6 打製石包丁(東から)

しせきはくさんへいせんじきゅうけいだい
3 史跡白山平泉寺旧境内

所在地：勝山市平泉寺町平泉寺 59 字 14

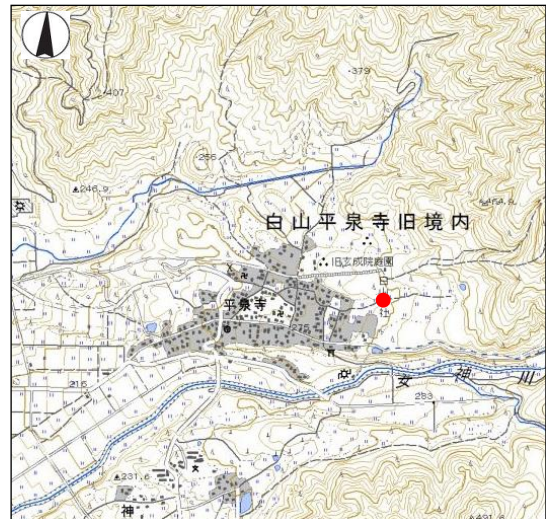
調査原因：史跡整備に伴う発掘調査

調査期間：令和 6 年 8 月 26 日～11 月 6 日

調査主体：勝山市

調査面積：185 m²

時代：鎌倉～室町時代



位置図 (S=1/50,000)

遺跡について 国の史跡指定を受け、「日本遺産」の構成文化財に登録された白山平泉寺旧境内は、白山信仰の越前側拠点寺院跡です。平泉寺の最盛期である室町時代には、48 の社や 36 の堂、6000 の坊院が建ち並んでいたと伝えられ、宗教都市として繁栄を極めていたと考えられます。しかし、天正 2 年(1574)、越前一向一揆との争いに敗れ、全山焼亡しました。

平泉寺の発掘調査は、平成元年（1989）から始まり、全国でも類を見ない規模の中世の石畳道や石垣が確認されています。今回の調査地点は、平泉寺白山神社本社から約 150m 南西に位置し、境内の南側に広がる「南谷坊院跡」にあたりま^{みなだにぼういんあと}す。

主な遺構 史跡整備に伴う限定した調査面積ですが、中世の土^ど塀^{べい}の基礎を兼ねる東西軸の石垣（総延長 26.66m、残存高 1.7m 前後）、南北軸の石垣（総延長 6.63m、残存高 2.25m 前後）や、石組水路（延長 27m、幅員 1.13m 前後、深さ約 1.0m）、坊院の敷地へ通じる出入り口の建物（門か）に伴う礎石など坊院の構造を検討する上で貴重な発見がありました。

主な遺物 発見された遺物量はコンテナで数えますと 17 箱で、中心となる時期は室町時代です。種類は多岐にわたりますが、坊院の暮らしのなかで使用された生活用品が大半でした。その中でも特筆すべき遺物は、特注されたと考えられる文様が施された越前焼の香^{こう}炉^ろ（推定）です。（藤本康司）



写真1 発掘調査地と「南谷坊院跡」周辺（西から）



写真2 東西・南北軸の石垣（北西から）



写真3 東西軸の石垣近景（北西から）



写真4 石垣検出作業（北西から）



写真5 スタンプ文がある越前焼（香炉か）

み むろやまじょうあと 4 三室山城跡

所在地：勝山市遅羽町嶗崎 16 字東三室 5-1

調査原因：看板設置工事

調査期間：令和 6 年 8 月 19 日～8 月 22 日

調査主体：勝山市

調査面積：3.2 m²

時代：縄文時代



位置図 (S=1/50,000)

遺跡について 三室山城跡は一向一揆が平泉寺と対峙するなかで築かれた中世の山城（砦）と伝えられています。この城跡の麓から西方向に広がる^{か が ん だ ん き ゅ う}河岸段丘の平坦部には、縄文時代早期から晩期まで長期間にわたり継続した縄文時代の集落遺跡「三室遺跡」があります。なお、三室山の麓の一部は、県史跡の「史跡三室遺跡」となっています。

今回の看板設置工事は、県道 168 号線に隣接した三室山城跡の麓部分に位置しており、発掘調査の結果、縄文時代の遺構が良好に見つかりました。この付近では、昭和期に発掘調査が行われ縄文時代後期の遺構が発見されました。しかし、今回の発掘調査では、縄文時代中期の遺構が見つかったことから先の調査で見つかった^{かんじょうれっせき}環状列石などの関わりについて今後の発掘調査の成果に期待されます。

主な遺構 発見された遺構は、竪穴住居 1 棟（炉跡含む）、^{ど こ う}土坑 4 基、小穴 1 基です。今回は、調査面積が大変狭いなかでも密集した状態で発見されました。竪穴住居跡は、壁際付近と考えられる部分が検出されましたが、隅部分が見つかっておらず、大きさなど詳細な内容は不明です。これらの遺構は、見つかった土器より縄文時代中期と考えられます。

主な遺物 縄文時代の土器（有・無文含む深鉢型土器など）や石器（^{だ せ い せ き ふ}打製石斧、^{たたき}敲・^{すりいし}磨石、^{せきすい}石錘）が出土しました。また、地元の^{ほうおんじさん}法恩寺山から産出される^{あんざんがん}ガラス質安山岩の^{はくへん}剥片が発見されました。遺物は、^{ほうがんそう}包含層や遺構の覆土から小片となって見つかりましたが、主に縄文時代中期に帰属するものが大半でした。（藤本康司）



写真1 発掘調査地の周辺(北から)



写真2 遺構検出(東から)



写真3 遺構掘削完了(東から)



写真4 竪穴住居床面の炉跡(北東から)



写真5 発見された縄文土器(一部)

くにみだけさんちょういせき 5 国見岳山頂遺跡

所在地：福井市高須町 102 字

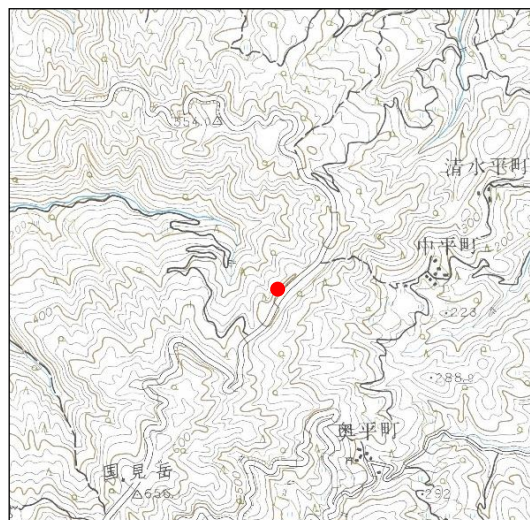
調査原因：風力発電事業

調査期間：令和 6 年 6 月 3 日～同年 6 月 26 日

調査主体：福井市教育委員会

調査面積：56 m²

時代：中世



位置図 (S=1/50,000)

遺跡について

福井市中心部より北西約 10km、国見岳（標高 656.1m）から北に延びる尾根上、標高約 380～520m 付近に 111 基の土盛群が点在しています。これらはいずれも日本海側に面した斜面上に立地しています。形状は楕円形を呈する土饅頭状で、長軸 3～8m、高さ 0.5～1.5m 程度の規模を測ります。周辺には「常森」「平家千枚田」など、平常盛にまつわる地名が残ることから、地元には常盛一族の墓との伝承が残っています。平成 6 年に地元の要請でその性格を確認するための発掘調査を実施しています。

調査の成果

令和 6 年の調査は、風力発電事業地内に所在する 1 基の土盛を対象に、規模や築造方法、性格解明を目的に発掘調査を実施しました。

土盛は、標高 505.4m 付近、北から南へ傾斜する尾根中央に位置しています。土盛は円形で、南北 5.2m、東西 4.8m、高さ 0.8m を規模でした。土盛は、尾根の傾斜を利用して造られ、高い方は尾根を削り出して低い方に盛土して造られていることが分かりました。なお、土盛頂部からやや南側で 0.8×1.1m の土坑を検出しましたが、遺物の出土はありませんでした。

今回の調査では、墳丘の規模及び構築方法は判明したものの、時期や性格の解明には至りませんでした。平成 6 年度の調査結果と併せて勘案すると、中世以降の墳墓である可能性が高いと考えられます。（白崎一夫）

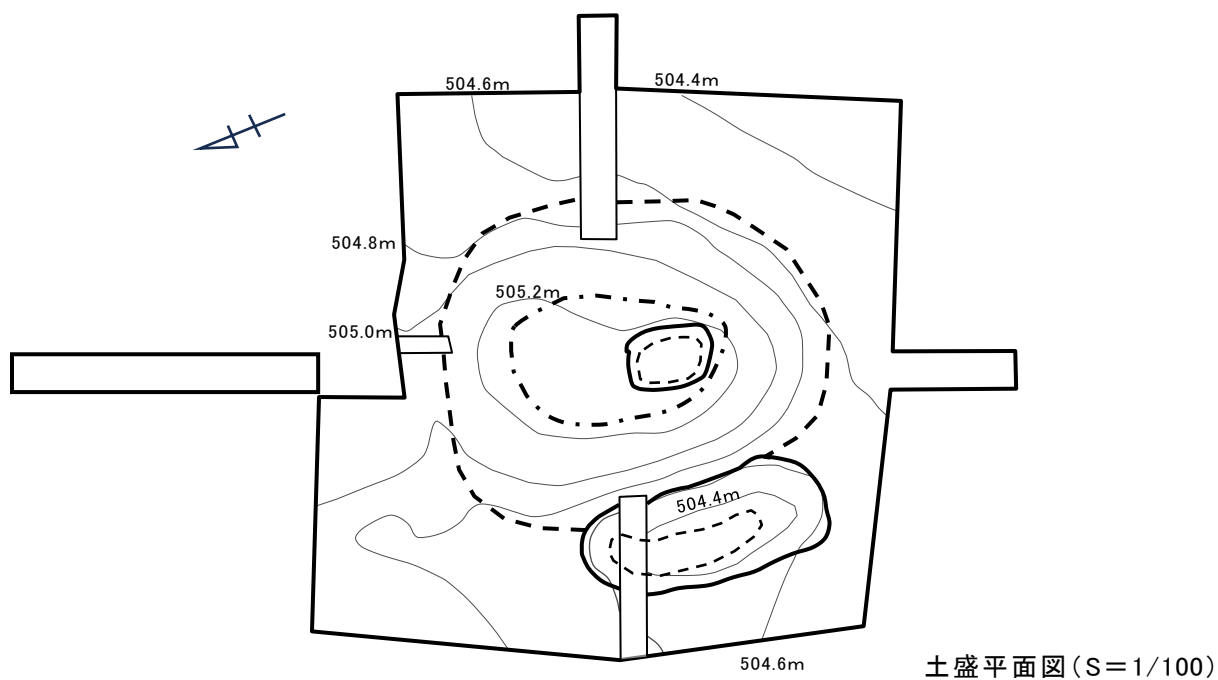


写真1 土盛全景



写真2 土坑



写真3 土盛縦断面

とくべつしせきいちじょうだにあさくらしいせき
6 特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡

所在地：福井市東新町

調査原因：史跡整備（第 156 次）

調査期間：令和 6 年 6 月～令和 6 年 10 月

調査主体：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館

調査面積：650 m²

時代：室町時代（戦国）



位置図（S=1/50,000）

遺跡について 一乗谷朝倉氏遺跡は、戦国大名朝倉氏の城下町の跡です。城下町が遺跡としてまるごと残る貴重な事例で、国の特別史跡に指定されています。

当館では、令和 5 年度から継続的に城下町中心部の南側に築かれた防御施設である上城戸跡のすぐ外側の調査を実施しています。今年度は、前年度の調査でみつかった武家屋敷地西側を区画すると考えられる土塁の内側を発掘調査しました。

主な遺構 武家屋敷の内部施設と考えられる石積施設や石組溝、砂利敷通路、建物の跡などを検出しました。砂利敷の屋敷内通路は、昨年度の調査で確認した門を起点とし、東方向に延びていくことを確認しました。また、調査区の一部では、下層遺構も確認しており、上層の武家屋敷が成立する以前の溝や石列、柱穴なども確認しました。下層遺構の時期は朝倉氏が一乗谷を本拠地と定める 15 世紀後半を遡らないと考えられます。調査区北端では、上城戸の濠と屋敷地の境で石垣が見つかりました。

主な遺物 室町時代後期(戦国時代)の遺物が中心です。越前焼の甕、瀬戸・美濃焼の天目茶碗や皿、瓦質土器の火鉢などの国産陶磁器に加え、染付の坏や青磁の椀などの輸入陶磁器が見つかりました。また、一乗谷でも出土数が限られる銅製の灯明皿も出土しました。出土した陶磁器の中には青磁の盤などの高級品が含まれており、当時の上級武家の暮らしぶりをうかがわせる遺物と評価できます。

今回の調査では、朝倉氏が一乗谷を本拠地と定める前の時期の遺物も少数見つかり、縄文土器や 13 世紀代に流通したと考えられる鉛釉陶器の破片なども出土しました。

（川崎雄一郎）



図 1 調査区全体図(空撮写真にオルソ図を合成)

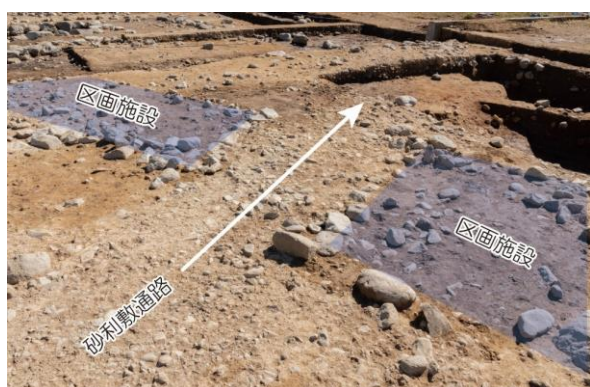


写真1 砂利敷通路・区画施設 西から



写真2 下層遺構面柱穴・石列 西から



写真3 土器・陶磁器・石製品



写真4 青磁碗



写真5 銅製灯明

すぎもとささのいせき 7 杉本笹野遺跡

所在地：鯖江市杉本町

調査原因：個人住宅建設

調査期間：令和6年8月～9月

調査主体：鯖江市教育委員会

調査面積：約 100 m²

時代：平安時代



位置図 (S=1/50,000)

遺跡について 発掘調査対象地は、鯖江市内を南北に延びる鯖江台地の西側縁辺部に所在しており、平成6年に福井県埋蔵文化財調査センターが「県道吉谷・朝日（県道185号）線改良工事」に伴って実施した発掘調査地から北西へ150mの場所に位置します。

福井県による調査では、古墳時代後期（6世紀頃）を中心年代とした集落跡が確認されましたが、今回調査では主に平安時代前期（9世紀）の遺物が出土しています。

主な遺構 遺構は井戸1基、土坑^{どこう}4基、柱穴・小穴^{ちゅうけつ}108基、溝2条、掘立柱建物^{ほったてばしら}とみられる柱穴列2棟を確認しました。掘立柱建物に復元される柱穴列①は、調査区の中央部から調査区西側に向かって8尺（約240cm）ごとに3基並びます。この柱穴列①は東西の正方位にのっており、方位を意識した建物が構築されていたことが考えられます。また、調査区北東側から中央にかけて4基並び柱穴列②は1間6尺（約180cm）に復元されます。このほか、調査区南西側に位置する井戸からは、主に平安時代の所産と考えられる遺物が出土しています。前述のとおり、調査地は鯖江台地上に所在するため、井戸を構築するためには相当の掘削深度が必要であったと考えられます。

主な遺物 古代の土師器^{はしき}・須恵器^{すえき}、弥生土器^{てっさい}、鉄滓^{ほうがんそう}などが遺物包含層、遺構から出土しています。いずれも完形のものはなく、大多数が小片でした。当調査で最も多く出土している遺物は平安時代の所産とみられる須恵器です。当該期の越前には多くの窯が分布しており、今回出土した資料もそれらの窯で焼かれ、運ばれたものであると

考えられます。その根拠として、今回出土した坏蓋^{つきふた}と呼ばれる器種の一部には、越前でよくみられる「重ね焼き」の痕跡が確認されています。

このほか、弥生土器が井戸の埋土、表土から 1 片ずつ出土しており、当該期の遺構が周辺に存在していたことを示唆します。 (森田真史)

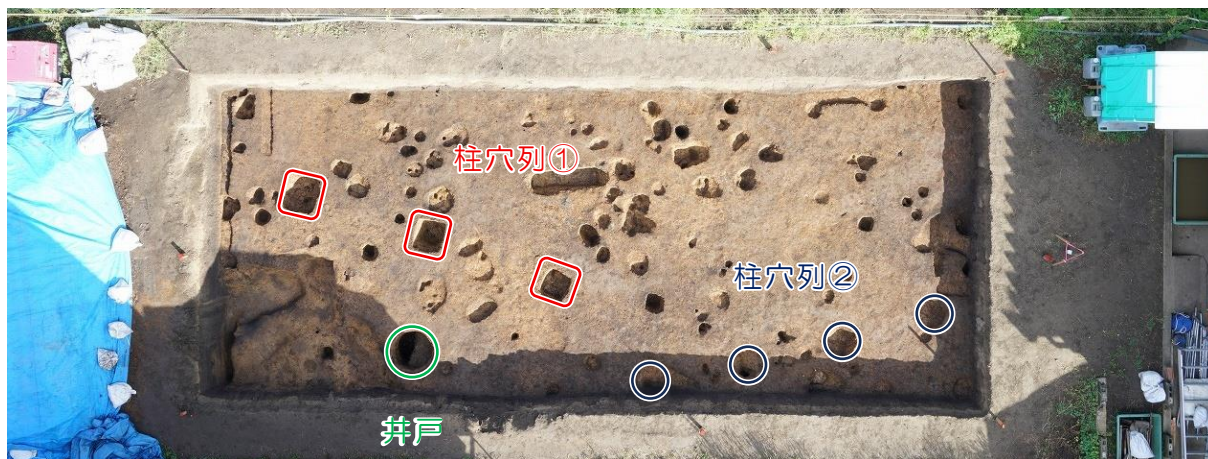


写真1 調査区全景(上が北西)



写真2 井戸断面(南西より)



写真3 重ね焼きの痕跡が残る須恵器



写真4 須恵器(坏蓋)

8 国府遺跡

所在地：越前市国府一丁目 4-13

調査原因：学術調査

調査期間：令和6年5月～7月

調査主体：越前市教育委員会

調査面積：約 100 m²

時代：平安時代



位置図 (S=1/50,000)

遺跡について 国府遺跡は、越前国府の推定域内に位置する遺跡です。過去の発掘調査では、国府 B 遺跡にて石製巡方^{せきせいじゆんぽう}が出土しており、今回の調査地はその南側にあたります。また、令和5年度には本調査地の西側にて発掘調査を実施しており、平安時代の溝や柱穴^{ちゅうけつ}、土坑^{どこう}などが検出されています。特に溝は、東西方向にはしり、その規模から国府関連施設の区画溝と想定しています。今回の調査ではその溝の延長を検出し、溝の範囲を探ることを目的として実施しました。

主な遺構 調査区北側にて柱穴が集中して検出されています。また調査区中央付近では東西方向に走る溝が2条検出されています。特に、溝①は令和5年度に実施した発掘調査で検出された区画溝の延長であり、調査区外の東側に続いていくものとされます。

主な遺物 時代は平安時代を中心に、江戸時代にいたるものも確認されました。平安時代の主な遺物は、緑釉陶器^{りょくゆうとうき}や須恵器^{すえき}、土師器^{はじき}などが出土しています。土坑①からは須恵器の坏身や甕^{つぎみ}が重なった状態で出土しました（写真2）。溝①からは淡緑色の釉薬が施された緑釉陶器の皿の底部部分が出土し、猿投窯^{さなげよう}で生産されたものが搬入されたものと考えられます（写真4）。

（西脇菜々）

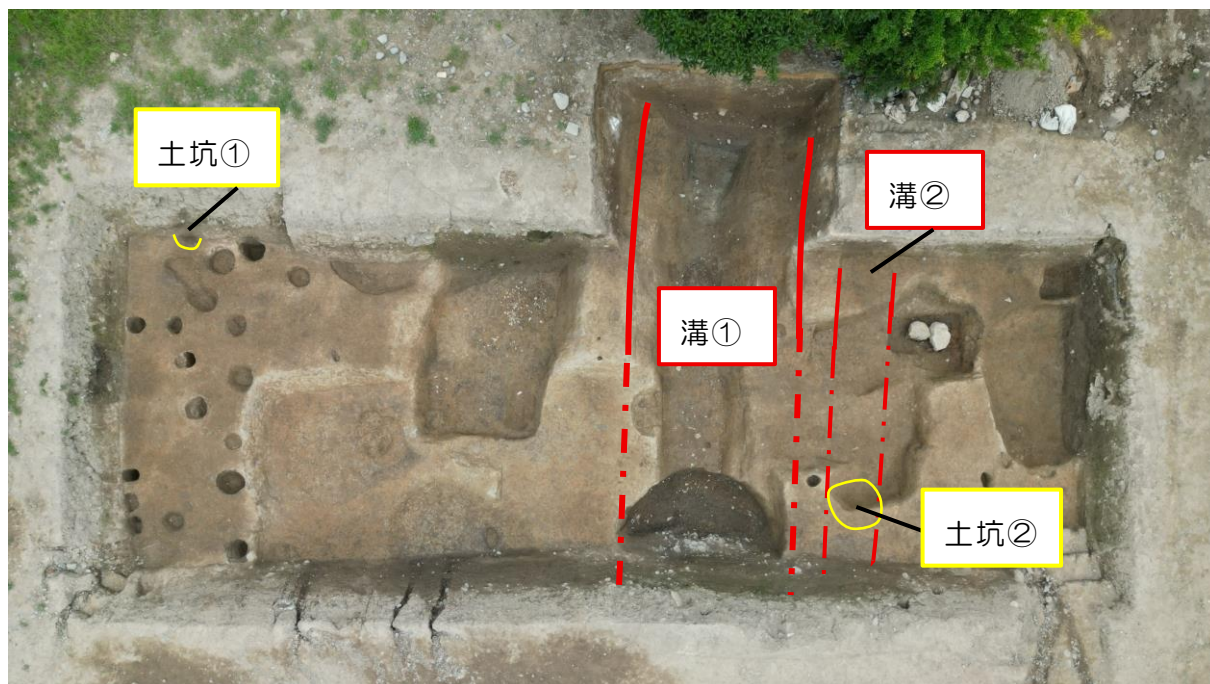


写真1 調査区全景写真(左が北・破線は想定ライン)

主な出土遺物



写真2 須恵器(土坑①)



写真3 須恵器(溝①)



写真4 緑釉陶器(溝①)



写真5 土師器(土坑②)

第40回 福井県発掘調査報告会

日時:令和7年8月9日(土) 13:00~16:00

会場:福井県立図書館 多目的ホール

主催:福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

第40回 福井県発掘調査報告会資料

— 令和6年度に発掘調査された遺跡 —

令和7年7月30日 印刷

令和7年8月9日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター